

# ジャンボ

——その生涯と人気の秘密

井上正美

はじめに

二〇〇五年九月一四日から三〇日にかけて、カナダはオンタリオ州のエイルマー博物館 (Aylmer Museum) で、或るゾウ (象) の没後一二〇年を記念した展示が催されたとのことである。<sup>①</sup>一八八五年九月二五日、おそらく二四歳の若さで亡くなったそのゾウの名前は、ジャンボ (Jumbo) とつた。

「ジャンボ」という言葉を、我が国でも一般的に使用される言葉としたのは、まさにジャンボのジャンボな功績といふべきであるが、それにつけてはこのゾウの絶大なる人気があつたからこそであつた。<sup>②</sup>数字の正確さは別にして、イギリスで一二五万人、アメリカで一〇〇万人の子どもたちがジャンボの背中に乗つたといわれるほどである。幼いウインストン・チャーチルや若きシーオドア・ローズヴェルトもジャンボのもとを訪れた。発明王エディソンは自らの大きな発電機にジャンボと名づけ、マーク・トウェインもその作品でジャンボを取り上げた。少し下れば、一九四一年にはジャンボ・ジュニアのダンボ (Dumbo) がスクリーン・デビューを果たすことになる。<sup>③</sup>

これだけのエピソードからでも、ジャンボの人気を窺い知ることができさるだろう。我が国でも、既に昭和六年の砂本悦次郎の『象』上巻に、「恐らくは、動物としての身分で達し得る、人気の最高峰さいこうほうに到達した偉

大なる標本とも云へやうか」とのジャンボ評がみられる。<sup>④</sup>なぜこのゾウは、それほどまでに当時の人々の心を掴んだのであろうか。ジャンボの生涯を時代背景や欧米の動物観・自然観と関連づけて考察することで、その人気の秘密に迫ってみたい。

## 第一章 ジャンボの生涯

ジャンボについては、砂本の『象』にも二〇頁以上にわたる記述があるが、残念ながら、この本の利用は現在それほど容易ではない。また、当然のことながら、一九三二年以降の情報は掲載されていない。そこで、まず、ジャンボの生涯をふり返りておきたい。<sup>⑤</sup>

ジャンボの出身地については、その名前の由来と同様に諸説聞かれるが、おそらく一八六一年にエリトリアとスーダンの国境付近、セティット川 (The Setit River) 流域で捕獲された。当時、まだ一歳ぐらいであつた。これをドイツ人のハンターにして冒険家であつたシユミット (Johann Schmidt) が買とり、その後、カイロに送られたこのゾウを、パリ動物園 (La Menagerie du Jardin des Plantes) が購入した。一八六三年一〇月二日、ゾウはパリ動物園に到着したが、一八六五年にはパリ動物園とロンドン動物園 (The London Zoological Gardens) との間に動物のトレードが成立し、同年六月二六日にロンドン動物園に移ることになっ

た。九月にはアフリカ・メスゾウのアリスも加わり、それまでアフリカゾウのいなかったロンドン動物園に、オス、メス二頭のアフリカゾウがお目見えすることとなった。<sup>⑥</sup>

ジャンボは、飼育係マシュー・スコット (Mathew Scott) のもとで、飼育されている動物では最大との評判を得るほどに成長する。子どもたちを背中に乗せて園内を歩くというサーヴィスは、ジャンボだけが行っていたわけではなかったが、やはりひととき大きなゾウに乗りたいたいというのは人情というべきか、彼の人気は他を圧していた。<sup>⑦</sup>

もちまえの人懐っこさと巨大さで人気を博すジャンボに異変が感じられるようになったのは、一八八〇年、おそらく彼が二〇か二一歳になった頃であった。昼間はよかったが、夜、小屋に独りになると、体を壁にぶっつけ大暴れをした。金属のバーに牙を突き立て、折ってしまうほどの暴れようであったという。<sup>⑧</sup> 一八八一年には、事故を恐れた園長のバーレット (Abraham Dee Bartlett) が動物学協会評議会 (The Council of the Zoological Society of London) に対して、万一の場合にはジャンボの命を絶つことについての許可を求めているほどである。<sup>⑨</sup>

同じ年の三月一八日に、アメリカでは、興行師バーナム (Phineas Taylor Barnum) とベイリー (James Anthony Bailey) が手を組み、巨大サーカス「地上最大のショー」"The Barnum and Bailey's Greatest Show on Earth" を旗揚げした。このサーカスの呼び物を探していたバーナムのもとに、エージェントから巨大アフリカゾウ・ジャンボの購入が可能だとの報せが届けられ、バーナムは即決した。<sup>⑩</sup>

動物園とバーナム側との間に二千ポンド (一万ドル) でのジャンボ売買契約が成立、一八八二年二月一八日に代金の支払が行われ、輸送作戦の開始となった。エレファント・ビルと異名をとるニューマン (William "Elephant Bill" Newman) がアメリカからやってきて、ジャン

ボ輸送の任に当たった。用意した巨大な枠箱にジャンボを入れようとしたが、ジャンボはこれを拒否して入らなかった。翌朝、ジャンボを歩かせて埠頭まで連れて行くことを試みたが、やはりジャンボは動こうとしなかった。

ジャンボがロンドン動物園を離れるのを嫌がっているとのニュースが伝えられると、イギリス国民の間にジャンボ売却反対の声が高まり、ジャンボ人気は一気に沸点に達した。新聞各紙が売却反対の投書や社説を掲載し、デイリー・テレグラフ紙はバーナムに対して、売買契約の解約条件を知らせるように求める電報を打った。バーナムのもとには、ジャンボ買入れを思いなおしてくれるようにと訴える手紙も多数届けられた。<sup>⑪</sup>

巷には、「動物園のペット、ジャンボをどうして手放すの」などのジャンボ・ソングが流れ、店には各種のジャンボ・グッズが、レストランにはジャンボ・メニューがお目見えした。<sup>⑫</sup> 動物学協会の会員の中には法的手段に訴える者も現れた。しかし、平衡法裁判所のチティー判事 (Sir Joseph William Chitty) は、売却は法的に有効であり、ジャンボはバーナムの正当な購入物であるとの判定を下した。<sup>⑬</sup>

ヴィクトリア女王も皇太子も控えめながらジャンボ問題への関心を表明し、下院でもジャンボ問題が取り上げられた。動物園関係者の家には脅迫文が舞い込み、一方、動物園には恐らくそれまでジャンボの名も知らなかったような人までが別れを惜しみに詰め掛けた。<sup>⑭</sup> 三月二日には女王暗殺をはかる大事件も発生したが、ジャンボ熱はおさまるところを知らなかった。しかし、三月一日になると、嫌がっていたジャンボが枠箱に入るようになった。<sup>⑮</sup>

枠箱に慣らす作業を経て、三月二三日早朝一時に、ジャンボの枠箱はウマに引かれて動物園を出発、テムズ川に停泊していたアッシリアン・モナーク号に積み込まれた。その夜の送別会で、駐英アメリカ大使ロー

ウエル (James Russell Lowell) は冗談半分に「イギリスとアメリカの唯一の火種はジャンボだ」と語った。<sup>16)</sup>

三月二四日、船はロンドンを離れ、テムズ川河口のグレイブゼンドまでタグボートに引かれて進んだ。そこには慈善家として知られたバーデット・クーツ (Lady Angela Burdett-Coutts) をはじめ、貴族や貴婦人、高位の軍人や国会議員たちが、ジャンボに別れを告げるべく待ち受けていた。<sup>17)</sup>

初めのころは船酔いに悩まされたジャンボであったが、四月九日、無事アメリカに到着した。アメリカでは懸念された粗暴さも問題になることはなく、「巨大な山……目もくらむほどのジャンボ」といったバーナム氏の宣伝文句と、実際の巨大さで、ここでもまたジャンボは絶大な人気を集めた。購入および輸送代の総額三万ドルを、ジャンボはアメリカに来て十日で清算し、六週間で三三万六千ドルを稼ぎ出した。三年半に百万もの北米の子ども達がジャンボの背中に乗り、九百万の成人が彼を見るために入場券を買ったといわれている。<sup>18)</sup>

サーカスのトップスターとして、ジャンボは、スコットとともにジャンボ・パレス・カー (Jumbo Palace Car) と呼ばれる専用の特別仕様車で移動、各地の興行をこなしていた。一八八五年九月一五日、夜九時頃、オントリオ州のセント・トーマス (St. Thomas) での興行も、そろそろファイナレを迎えようとしていた。出番を終えたゾウたちが、次々に列車に乗り込んでいった。二九頭が乗り終え、後はジャンボと親指トムという小さなゾウを残すだけとなった。彼らの右手に列車、左手は土手で約二、五メートルの傾斜面となっていた。とつぜん背後から列車の明かりが近づいてきた。通常のダイヤにはないグラント・トランク鉄道の臨時貨物列車であった。<sup>19)</sup>

危険を察知したジャンボは、鼻でトムを土手に投げ飛ばした。トムは

後ろ脚を折ったが、命は助かった。続いてスコットを押し退けたが、ジャンボ自身はもはや身をかわす余裕がなく、機関車と衝突、三分後には息を引き取った。<sup>20)</sup> というのは、事故の後にバーナムが翻案した感動的シナリオであった。現実には、二頭のゾウともにパニック状態に陥り、避難し切れなかった。

機関士バーニップ (William Burnip) は前方に巨大な塊をみると、列車を逆走させて危険を回避しようとして試みたが、間に合わなかった。機関車の排障器がトムに後から突っ込み、彼を土手の斜面に跳ね飛ばした。続いてジャンボに追突した。大音響とともに機関車は傾いて止まり、炭水車と最初の車両は完全に脱線した。ジャンボは致命傷を負って倒れ、口から血が流れ出た。駆け寄ったスコットは、一目見てすべてを理解した。腕をジャンボの鼻にまわし、子供のように泣き崩れた。<sup>21)</sup>

こうしてジャンボは二十代半ばでその生涯を終えることになったが、彼の仕事は終わらなかった。バーナムは、ジャンボを購入して一年後の一八八三年には、すでに、剥製製作者ウォード (Henry A. Ward) とジャンボの剥製製作について契約を交わしていた。<sup>22)</sup>

事故の知らせを受けて、ウォードは一七日には事故現場に入った。ウォードとその助手二人、そして地元の屠殺業者六人で、ジャンボの解体に当たったが、作業終了までに二日を要した。腐敗の進行とともに町半分に悪臭が広がったと伝えられる。

皮と骨はニューヨークのウォード自然科学研究所に持ち込まれた。七四四八〇本の釘を使って皮を引き伸ばし、多く詰め物をして、体高一二フィートの剥製が完成したのは、半年後のことであった。一八八六年二月二六日、剥製ジャンボが披露され、ウォードの発案で、ジャンボの象牙粉末入りゼリーが集まった報道陣に振舞われた。<sup>23)</sup>

同年、バーナムはロンドン動物園から二百ポンドでアフリカ・メスゾ

ウのアリスを購入した。寡婦ジャンボ役を担ったアリスは、ジャンボの剥製、骨格標本に同伴して各地を回るようになった。しかし、その彼女も、一八八七年にブリッジポート (Bridgeport) のサーカス冬季営舎で火災に会い死亡した。<sup>④</sup>

ジャンボの方は、一八八九年、変わり果てた姿でイギリスに里帰りを果たした。グラッドストン、ヴィクトリア女王、皇太子も弔意を表したとのことである。<sup>⑤</sup> その年の内にアメリカに戻ったジャンボの骨格標本は、ニューヨークのアメリカ自然史博物館 (The American Museum of Natural History) に収められ、一九六九年まで展示されていた。剥製はマサチューセッツのボストンにあるタフツ大学 (Tufts University) に保存された。バーナムはこの大学の初代評議員の一人で、彼の寄付によってバーナム自然史博物館 (The Barnum Museum of Natural History、後にはバーナム・ホール・Barnum Hallと呼ばれた) が設立され、ここに彼の動物標本が納められていた。ジャンボの剥製も最終的にここに納められることになった。<sup>⑥</sup>

剥製ジャンボはタフツ大学のマスコットとなった。スポーツチームは彼の名をなおり、学生たちは試合や試験のグッド・ラックを願って、ジャンボの鼻にコインを入れたり、尻尾の毛を引っ張ったりした。一九三九年にバーナム・ホールは学生のラウンジに生まれ変わり、以前の展示品は撤去されたが、ジャンボだけはそのまま残された。<sup>⑦</sup>

ジャンボ没後九〇年になろうかという一九七五年四月一四日、真夜中過ぎ、バーナム・ホールの冷凍装置の配線不具合から火災が発生、バーナム・ホールのほとんどが焼失してしまった。ジャンボも灰となり、剥製ジャンボの雄姿は永遠に失われてしまった。だが、彼の灰はピーナツ・バターの瓶に保存され、学生たちは、それからは、グッド・ラックを祈ってこの瓶を擦るようになった。

一九九九年、体育学部指導教官は、その職を辞するにあたり、新任教官へのジャンボ遺灰引継ぎセレモニーを行った。灰は本当にジャンボのものなのだろうかとの問いに、彼はこう答えた。「ジャンボが茶毘にふされたわけではないことは分かっている。彼は火事で焼けてしまったのだ。何もかもが、一緒になって焼けてしまった。この灰はジャンボのものだと信じていることだ。そのなかのどこかに彼はいる。どの灰がジャンボのものかを言うことはできないが、でも、その中に彼はいるのだ。」<sup>⑧</sup>

一方、ジャンボが亡くなったセント・トーマスの地には、一九八五年、ジャンボの百年忌にジャンボ像が建立された。十年後には、セント・トーマスの市長がタフツ大学を訪れ、火災を免れたジャンボの象牙の一部をセント・トーマスに持ち帰ることを許され、これをエルギン・カウンティ・パイオニア博物館 (The Elgin County Pioneer Museum) に贈呈した。さらに市長は、アメリカ自然史博物館に対してジャンボの骨格標本の貸し出しを求めたが、こちらは実現できなかった。今もなお、セント・トーマスには、アメリカ自然史博物館に対して骨格標本返還を求める声があるという。<sup>⑨</sup>

## 第二章 ジャンボの人気の秘密 その1

この劇的生涯そのものがジャンボの人気の秘密であると、言ってしまうえば言えなくはない。ただ、彼の劇的生涯は、人気の原因であると同時に人気の結果でもあるだろう。人々がジャンボに非常な関心を持つほどに、ジャンボの生涯は人間の都合によって影響される度合いが強まり、通常の動物にはありえないような生涯を送ることになったと考えられよう。そうだとすると、人々が、そもそもこのゾウに大変な関心を持つことになった理由は何だったのだろうか。

まず、基本的な人気の要因として、ジャンボの大きさがあげられる。一八八二年の雑誌スペクテイターには、「飼育できるという意味では、ゾウはすべて人々の友であるが、中でもジャンボだけが、人々の理想を実現している」との指摘がある。人々はゾウに大きさを期待する。だが、実際目にするインドゾウは想像していたほどのこともなく、騙されたという思いさえ浮かぶ。この点、ジャンボだけは人々の期待を裏切ることのない、真に巨大なゾウなのである。

当時の人々が、とにかくジャンボの巨大さに魅了されたことは間違いないが、ただ、ゾウに大きさを期待する心情は、必ずしもこの時期の人たちに限られるものではないだろう。当時の人々が特にこの巨大アフリカゾウに関心を寄せた理由としては、さらにその時代特有の事情を考慮に入れて考えてみる必要がある。

「僕はすばらしい英国の旗が大好き、坊ちゃんたち、僕はいつもこの旗を自慢することでしょう／＼このことはちゃんとわかってください、僕がヤンキーの国はすきではないということを」。当時作られた詩「動物園のベットの別れ」を紹介しつつ、ハリエット・リトヴォ (Harriet Ritvo) はイギリスでのジャンボ熱 (Jumbomania) をこう解説している。

「動物愛護からの関心は明らかに愛国心からの関心の二の次であった。問題とされたのはジャンボがサーカスで苦勞するかもしれないということではなく、アメリカ合衆国がジャンボを英国からまんまと力づくで手に入れたということである。」「英国社会は大西洋の向こうの競争相手に彼を譲り渡すことにつらい思いをしたのである」。

動物学協会がお金を必要としているのならば、ジャンボの売却金額ぐらゐは寄付で容易に集めることができるという声が聞かれたように、自分たちの動物園の人気者がお金で売り渡されるといふことに、イギリス国民のプライドが損なわれたのは確かなところであろう。しかも購入し

たのはアメリカの興行師であった。「世界の工場」イギリスの地位を襲い、工業生産世界一位へ躍り出ようとする勢いのアメリカ、その国の興行師が金の力にものをいわせ、イギリス国民の財産を奪い取っていく、このあたりが、イギリス国民にはいかにも耐え難いことと感ぜられたのであろう。

これに対してバーナムは、金銭での購入を自らの仕事として誇らしげに語り、アメリカ国民を代表するかたちで、断固購入の姿勢を崩さなかつた。「五千万のアメリカ国民はジャンボの到着を熱望しております。お金で購入できる最高のものを展覧するという、四〇年間変わらない私の仕事からして、ジャンボは絶対こちらに必要なのであります。一〇万ポンド積まれたとしても購入を取りやめるつもりはありません」と。ニューヨーク・ヘラルド紙もバーナムの決意を支持する文章を掲載した。「……兩國間の友誼關係の決裂を見んとする一恨事なれども吾人としては今更此象を手離さざるは寧ろ當然の事なりとす」と。

このように、ジャンボ購入をめぐる英米両国民のプライドがぶつかりあつたところに、異常なジャンボ熱の原因があつたと考えることができる。砂本の言を借りれば、「實際、こんな立派な國際的問題を捲起した人氣ゾウも、先づ今後とも出て来ることはないだらう」。

さて、「愛国心からの関心の重要性」を認めたいので、リトヴォがそれに比べれば「明らかに二の次」とした、「動物愛護からの関心」(humanitarian concerns) についても考えておこう。

確かに、ジャンボ熱は購入問題を機に高まった。だが、レス・ハーディング (Les Harding) にしたがうと、ジャンボがバーナムに売却されたというニュースは、一月二五日にタイムズ紙によって伝えられたが、反対運動が一気に噴出したのは、二月一八日から一九日にかけての最初の輸送作戦が、ジャンボの抵抗で失敗してからのことであつた。つまり、

ジャンボ自身が動物園から離れたがっついてはいないということが報道されて以降であった。<sup>⑧</sup>

二月二一日、タイムズ紙上に意見を寄せた動物学協会の会員は、「自分の家と家族から引き離そうとする試みに際しての、このかわいそうな動物の痛ましくもほとんど人間的ともいえる嘆き」によって、この売買に対する嫌悪感が強まったのだと述べている。<sup>⑨</sup>動物園の人氣者が売却されたことに加えて、それによってジャンボが悲しみ、苦しんでいることへの同情がジャンボ熱を沸騰させる要因になっていたように思われる。

ジェームズ・ターナー (James Turner) の研究に詳しいところだが、一九世紀といえば、動物虐待防止の法律、動物愛護協会の設立、雑誌『動物世界』の発刊などに象徴されるように、イギリスでもアメリカでも、動物虐待に対する批判と動物愛護精神が高揚した時代であった。動物も人間と同じように感覚・感情を持ち、痛み・苦痛を感じる存在であることが強調され、そのような存在を苦しめる残酷さが問われた。逆に、人間の内に潜む獣的野蛮さを抑え込むためにも、動物への思いやり、哀れみ、同情が強く求められた。<sup>⑩</sup>

ジャンボ問題は、このような動物愛護精神にとって、まさに発揚の好機であったように思われる。実際、ジャンボの輸送に際しては、動物愛護協会の会長が、ジャンボに対する手荒い扱いがないかどうかを見守り、「突き棒」の使用に反対した。<sup>⑪</sup>それでも、狭い枠箱に詰め込まれての旅を考えれば、ジャンボの肉体的苦痛が避けがたいことは容易に予測されるところであったが、それ以前に、ジャンボは、肉体的苦痛以上のものを露にしたのだった。「痛ましくもほとんど人間的ともいえる嘆き (the pathetic and almost human distress)」を。ペル・メル・ガゼット紙の論説によると「このゾウは理性的で忍耐強い断固たる抵抗 (an intelligent, patient, resolute resistance) を示している」のである。

同紙は続けて訴える。「……ジャンボは明らかにロンドンの友とわかれたくないのだし、同様に、ロンドン市民も、たとえどんな感覚どんな感情の持主であれ、このゾウがいなくなると思えば淋しさをぬぐえまい。これがわが年老いた友に報いる道だろうか。純粋な恵みを、暖かで無邪気な楽しみを与えてくれた最良の恩人に報いる道だろうか。」<sup>⑫</sup>

ロンドン・スタンダード紙は、残酷さの程を次のように説明している。「南部の奴隷所有者が競り売り台で法的権利を行使して、ひとつの家族を引き裂いた時、世間はその非人間的な行為に呪詛の声を上げたのだ。この成熟した動物を、彼が愛着を持つその家から、そして彼に対する愛情をかくも明瞭に表明している友人たちから引き離すとは、確かに、勝るとも劣らぬ残酷さではある」と。<sup>⑬</sup>

人々は、アリスを妻とみなしてジャンボに家庭を持たせ、自分たちを友人として故郷を持たせ、人間化するほどに共感しやすくなるジャンボと惜別の情を共有しようとした。人間のように苦しむ巨大ペットに限りない同情と哀れみを示し、動物に対する自分たちの優しさを思いやりの深さを実感もすれば、表明もできたということではなかっただろうか。

上部に小さく「ジャンボ イギリスのプライドと栄光」、下部には大きく「ジャンボ、イギリスの損失そしてアメリカの利益」と説明あるいは見出しのある当時の風刺画には、ベルトと鎖で体を拘束され、鎖を引きさちぎろうとするジャンボが描かれている。ジャンボを拘束する輸送の残酷さを訴えているようにも見えるが、この絵は買い手側のバーナムによって、ジャンボのアメリカ到着に先立って作成されたものだという。そうになると、動物園でのジャンボの哀れな拘束状態をアメリカ国民に訴えるものだったと考えられる。苦しむ動物の姿が、アメリカの人々にもジャンボへの思いを募らせた、あるいは募らせると予想されたということであろう。<sup>⑭</sup>

この解釈が正しければ、風刺画の説明と図柄の組み合わせはなかなか意味深長である。動物愛護からの関心は、愛国心からの関心と絡まりながら、しかも対立する二国間を通底するかたちで、ジャンボへの関心を掻き立てる要素となっていたと考えることができるだろう。

### 第三章 ジャンボの人気の秘密 その2

ターナーが指摘しているように、一九世紀も六〇年代以降には動物愛好家の中には「生命それ自体の神聖さ」という観念が広がり、野生動物の生存権もそれ自体として認められるようになっていった。しかし、こうした考えを持っていた人の数は、全体の中ではなお少数であったと見ておくべきだろう。当時の動物愛護精神は、一般的には人間に近いペットや家畜に対して圧倒的に強力に発揮され、野獣は同情の範囲外、害獣となれば、これは駆除の対象でしかないという傾向にあった<sup>④</sup>。

ジャンボの場合も、人間的環境に馴化し、家族・友人と離れがたく苦悩するその姿がほとんど人間的でさえあったから、当時の動物愛護精神の同情的になったと言えるが、この点に、ジャンボ人気のもうひとつの要因が見出せるように思われる。つまり、アフリカゾウのジャンボが飼いならされたということである。

当時、アフリカの地でアフリカゾウは家畜化されてはいなかった<sup>⑤</sup>。確かに、アジアゾウも、繁殖にいたるまで人間の管理下にあるような、厳密な意味での家畜とはいえないだろう。しかし、アジアゾウが人間に飼いならされ、人間世界の一員として活動してきた歴史は長い。特にトラ狩などで、人間を背中に乗せ、野獣に立ち向かう姿は、アジアゾウが人間の側に立っているという強い印象を与える<sup>⑥</sup>。

また、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』の中で、まだ鉄道

の通っていないインドの森林地域を、主人公フィリアス・フォッグ一行を乗せて運んでくれたのも、彼が現地人から購入したゾウであった。鉄道が途切れた途端、人身御供のおこなわれる野蛮な世界が現出するが、その世界にありながら、文明人と同じ方向に視線を向けて活動するこのゾウの姿は、当時の欧米人が抱くアジアゾウの典型的なイメージと見てよいだろう<sup>⑦</sup>。

これに対してアフリカゾウは、アジアゾウのように飼いならされて人間世界に取り込まれることなく、もっぱら自然の側に属し、文明世界と対峙する存在であった。

一八五八年、トマス・ベイネズ (Thomas Baines) が描いた絵画では、暗黒の背景の中を明るく光を浴びて進む蒸気船に対して、耳を広げ鼻を上げて迎え撃つかのよう立つゾウの姿が描かれている。蒸気船に小さく描かれた人物が発砲しているが、銃弾はむなしく水面を打って水しぶきを上げている<sup>⑧</sup>。

スタンリーは、リヴィングストーン発見のためにアフリカに入った際、初めて野生のゾウの群れを目撃し、ゾウこそは「百獣の王」の称号に相応しいと感じた。彼らは「自由で征服されざる、森と沼の主」であり、ちっぽけな人間など全く太刀打ちできないと記述している。その後、一頭のアフリカゾウと突然遭遇した時には、「巨大なモンスター、アフリカ世界の力の化身」と、その印象を伝えている。この巨大モンスタを目の当たりにして、スタンリーは発砲することもなく、早々に退散したのであった<sup>⑨</sup>。

ベイネズ、スタンリーのアフリカゾウは、文明の力も無力なほどのアフリカの大自然を象徴するものとして描かれ、畏怖、さらには畏敬の念すら感じられる表現となっている。だが、この大自然の主は、欧米人から常に畏敬のまなざしを向けられる対象とは限らない。象牙を求めるハ

ンターにとつては心躍る標的でもあれば、命を懸けて挑まねばならぬ強敵でもあった<sup>⑤</sup>。文明化イコール植民地化を目指してアフリカに乗り込む文明人にとつて、アフリカの大自然は克服すべき野蠻の地であり、アフリカゾウはその代表として文明に対峙する存在でもあった。それも、単に向きあっているだけとは限らない。

二〇世紀初頭、アフリカでゾウ・ハンターとして活躍したベル (W. D. M. Bell) は、その著書の中で、アフリカにおける巨大オスゾウのハンティングこそ世界中で最もエキサイティングな狩りだと断言した上で、これらの巨大オスゾウは、昼間はブッシュをひそめ、夜間には現地の人たちの農園を襲う習性を身に付けている、「略奪する疫病神 (marauding pest)」と表現している<sup>⑥</sup>。

少し下るが、かのシヴアイツァーも、一九一四年に、「わたしの心配は患者の食糧調達である。ここには飢饉が往々ある。……象のためである」と言っている。その理由を彼は、文明と自然に類似した「文化」と「野獣」の対立構図の中で説明している。

文化が広がれば普通は野獣が死に絶えると想像するが、アフリカでは逆に野獣が増加する場合もある。現地の人々が伐木と筏流しに力を入れるようになり、ゾウ狩りをしなくなる。そのため野獣すなわちゾウが増加し、近隣のバナナ耕地を襲うようになり、飢饉が起こるのだと、彼は言う。ゾウによる被害はそれにとどまらない。ゾウは電信柱をなぎ倒し、電信にも障害を引き起こすとも語っている<sup>⑦</sup>。

アフリカの地にあつてアフリカゾウは、文明の二重の破壊者として立ち現れる。農耕文明、そして電信という最先端の近代工業文明の破壊者として。「文明化の使命」を担う欧米文明人にとつて、アフリカゾウは、野獣、時としては破壊力抜群の害獣と捉えられる。その一員であるはずのジャンボが、アフリカから文明世界へやってきたのだった。文明世界

で彼は、アフリカ大陸を体現できるほどに巨大になってみせた。短期間ではあったが粗暴になって、内に潜む野性の片鱗を示して見せた。それでも、飼育係のスコットがいれば大人しく、動物園を離れる二日前の三月二〇日にも、まだその背に人を乗せていた<sup>⑧</sup>。

リトヴォが指摘するように、欧米人にとつて、「最良の動物とは、勤勉に従順で進んで働く召使いの性質を示す動物であった。最悪の動物とは、仕えようとしめないだけでなく、人間の優位にあえて挑戦する動物であった<sup>⑨</sup>。」野蠻の世界にあつては最悪の動物も、文明世界では洗練され、最良の動物となるのである。これぞ文明の力というべきであろう。

近代文明といわず、聖書にしても人間が動物を管理・利用することに、この世のあるべき秩序を認めていたヨーロッパにおいて、一見、制御不可能と思えるこの巨大なアフリカ・オスゾウの人間世界への馴致は、文明の持つ力、それも、あるべき秩序を作り出すことのできる正しい力を、人々に実感させたことであろう。文明人が自然を自らの手で支配・管理しているのだという、文明人としての自尊心を満足させたことだろう。この観点からすれば、ジャンボの巨大さは、一般的なゾウの魅力としてジャンボの人気を支えただけではなく、一見しての制御不可能性を印象づけることで、この時期ならではの意味を持ったのではないかと考えられる。

さらに、ジャンボは、当時世界各地に文明を運んだ、いわば近代文明の象徴である蒸気船と蒸気機関車とで移動し、ついには鉄道事故で生涯を閉じることになった。文明的な、あまりに文明的なアフリカゾウの死ではあった。列車の破損状況からすれば、この激突の勝負は五分五分だったかもしれないが、しかし、この際もまた、人々の同情と哀れみが表出され、ジャンボの死が繰り返し描かれることで、汽車のダメージのほうは陰に隠れ、蒸気機関車の犠牲になったジャンボのイメージが際立つ

こととなった。

人々は、ジャンボの死を悲しみ悼むほどに、その裏で、ヨーロッパ文明の象徴である「鉄のウマ」(Iron horse、ウマもまたヨーロッパ家畜文明の極みであり、最も高貴なる動物であった)、すなわち蒸気機関車の力が、アフリカ自然の象徴であるアフリカゾウを斃したという事実を感知していたのではないだろうか<sup>⑤</sup>。

ジャンボの最期を伝える写真の中には、最上部に、ジャンボに衝突した文明の使者＝蒸気機関車を配し、そこから機関士が乗り出すように正面を見つめている構図のものがある。ジャンボはその下の土手に横たわり、その周りにスコットをはじめ関係者が立っている。アフリカで、射殺されたゾウが、それを打ち倒したハンターや、そのために使われた文明の利器＝銃とともに写されるゾウ狩りの写真と似通った雰囲気を持っている<sup>⑥</sup>。

文明世界に馴化し、そして文明に殉じること、アフリカゾウ・ジャンボは、ヨーロッパ近代文明が求める文明と自然の、さらにはヨーロッパとアフリカの、あるべき関係を示してみせたと言えそうである。野性を手なづけ、翻弄し、屠り去る文明の姿に、多くの人々は恐れや疑問を持つよりも、文明の力を感じ取り、むしろこの世界のあるべき秩序を確認して安堵感と満足感おほえる、そういう時代だったのであろう。その余裕のゆえに、そしてそれを感じさせてくれるがゆえに、人々は限りない愛情と同情と哀れみをジャンボに対して注ぐことができたのではないだろうか。ここに、かの時代のジャンボ人気の秘密があったのではないかと思われる。

① <<http://www.amtelecom.net/~aylmermuseum/jumboelephant.htm>>

② Jumboという言葉自体はこのゾウの登場以前から使われていた。Les

Harding, *Elephant story: Jumbo and P. T. Barnum under the Big Top*, North Carolina: Jefferson, 2000, pp. 17-18. *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989, p. 305. *World Wide Word*: <<http://www.worldwidewords.org/qd/qd-jum3.htm>>

③ Harding, *op. cit.*, pp. 35, 94. Susan Wilson, "An Elephant's Tale", *Tufts online Magazine*, Spring, 2002, p. 2: <<http://www.tufts.edu/alumni/magazine/spring2002/jumbo.html>> トリントン・シモンソン『エジソンの生涯』(矢野徹・白石祐光・須山静夫訳)新潮社 一九六二年 二二二頁。Mark Twain, *Following the Equator, The writings of Mark Twain*, vol. 21, Definitive ed., (Reprint. Originally published: New York: Gabriel Wells, 1923), 東京: 本の友社, 1988, pp. 313-315. ヴーク・トウエイン『赤道に沿って』(飯塚英一訳)下 彩流社 二〇〇〇年 三二〇—三三三頁。Harding, *op. cit.*, p. 1. *Wikipedia*: <<http://en.wikipedia.org/wiki/Dumbo>>

④ 砂本悦次郎 『象』上 世尊普賢會出版部 一九三二年 八六七頁。

⑤ 前掲書 八六七—八九〇頁。

⑥ 前掲書 八六八—八六九頁。Harding, *op. cit.*, pp. 12-16, 25. 名前の由来については、注②の文献を参照のこと。

⑦ *Ibid.*, p. 24. John Edwards, *London Zoo from old photographs 1852-1914*, London, 1996, pp. 63-115.

⑧ 粗暴になった原因として、いわゆるマストの時期にあたっていたとみる見方もある。しかし、歯の生え変わりと関係していたようである。Richard G. Van Gelder, "A Big Pain, Whatever was the matter with Jumbo?", *Natural History*, March, 1991, pp. 22-27. Harding, *op. cit.*, pp. 35-37. 砂本 前掲書 八七〇頁。

⑨ Harding, *op. cit.*, 38. Richard Carrington, *Elephants: a short account of their natural history, evolution and influence on mankind*, Harmondsworth, 1962, pp. 213-214. リチャード・キャリンントン著『象の話』(砂本悦次郎訳)愛象会出版部 一九七一年 一四七頁。

⑩ P. T. Barnum, *BARNUM'S OWN STORY The Autobiography of P. T. BARNUM*, 1961, reprinted, Gloucester: Peter Smith, 1972, p. 429.

- Harding, *op. cit.*, pp. 40, 91. 砂本 前掲書 八七一頁。
- ⑪ デイリー・テレグラフの電報、バーナムからの返電、それを受けてのデイリー・テレグラフの論説「子供たちからバーナムへの嘆願の手紙三通が『象』に訳出された」。砂本 前掲書 八七三―八八三頁。
- ⑫ Carrington, *op. cit.*, pp. 217-218. キャリントン 前掲書 一四九―一五一頁。Harding, *op. cit.*, p. 48. M. R. Werner, *Barnum*, Garden City, 1927, p. 336.
- ⑬ *Ibid.*, p. 339. Les Harding, *op. cit.*, p. 56. 砂本 前掲書 八八六頁。
- ⑭ Harding, *op. cit.*, pp. 47-48. Willson, *op. cit.*, p. 3. Sebastian D. G. Knowles, “The True Story of Jumbo the Elephant”, in *Twenty-first Joyce*, edited by Ellen Carol Jones and Morris Beja, Gainesville, Fla.: University Press of Florida, 2004, pp. 97, 103.
- ⑮ *Ibid.*, p. 101. A. H. Saxon, *P. T. Barnum: the legend and the man*, New York: Columbia University Press, 1989, p. 293. 梓箱に入るといふことと理由についてはHarding, *op. cit.*, p. 54.
- ⑯ *Ibid.*, p. 60. 砂本 前掲書 八七二頁。
- ⑰ Harding, *op. cit.*, pp. 60-61. M. R. Werner, *op. cit.*, pp. 342-343.
- ⑱ Harding, *op. cit.*, pp. 6, 94.
- ⑲ *Ibid.*, pp. 6-7.
- ⑳ *Ibid.*, p. 99. A. H. Saxon, (ed.), *Selected Letters of P. T. Barnum*, New York: Columbia Univ. Press, 1983, p. 273.
- ㉑ Harding, *op. cit.*, pp. 7-8, 104. Wilson, *op. cit.*, pp. 1, 5-6. Knowles, *op. cit.*, p. 106. 砂本 前掲書 八八七―八八八頁。
- ㉒ John R. Russell, ‘Jumbo’, *University of Rochester Library Bulletin*, Vol. III, No. 1, 1947, pp. 14-19. シャンボのおまけに劇的な最期と死に先立（この複製製作契約は「シャンボの死は仕組まれたものでは」との憶測を生む要因となった。Harding, *op. cit.*, p. 99. Saxon, *op. cit.*, pp. 300-301.
- ㉓ *Ibid.*, pp. 99-101, 113. Barnum, *op. cit.*, p. 444. 砂本 前掲書 八八八―八八九頁。
- ㉔ Barnum, *op. cit.*, p. 444. Edwards, *op. cit.*, p. 96.
- ㉕ Eric Scigliano, *Love, War, and Circuses*, Boston, 2002, p. 195. James W. Cook (ed.), *The Colossal P. T. Barnum Reader*, Urbana: University Press, 2005, pp. 229-230.
- ②⑥ Wilson, *op. cit.*, pp. 3, 6-8. Saxon, (ed.), *op. cit.*, pp. 308-309. 砂本 前掲書 第八十三圖 八八八頁。
- ②⑦ “Elephant tale: The story of Jumbo”, *Tuffs Journal*, August 6, 2004, p. 2: <<http://tuftsjournal.tufts.edu/archive/2001/october/tufts150/index.shtml>> Mike Friedman, ‘About Jumbo’, *Tuffs University Jumbo Club*, 2004, p. 1: <<http://jumboclub.org/aboutjumbo.asp>>
- ②⑧ Wilson, *op. cit.*, p. 10.
- ②⑨ St. Thomas the Jumbo Monument: <<http://www.elgintourist.com/sthomas/jumbo.shtml>> Mark Bellis, “Jumbo-Back from the Dead”: <<http://www.geocities.com/lostnfound/jumbo.htm>> Patrick Maloney, “St. Thomas campaign aims to take on N.Y. over Jumbo”, *London Free Press*: <<http://www.fylondon.com/perl-bin/niveau2.cgi?s=arts&p=76190.html&a=1>>
- ③⑩ Harding, *op. cit.*, p. 23.
- ③⑪ Harriet Ritvo, *The Animal Estate: The English and Other Creature in the Victorian Age*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1987, p. 232. ハリット・リトヴォ著『階級と動物』（三好まゆみ訳）国文社 二〇〇一年 三二九―三三〇頁。
- ③⑫ Harding, *op. cit.*, 43. トーク・トウヘインの『赤道に沿って』で「シャンボはネルソン提督記念碑やシェイクスピアの生家と同列のイギリス国民の宝と位置づけられ、それゆえにバーナムの購入のターゲットになろうとせよ。」Twain, *op. cit.*, pp. 313-315. トウヘイン 前掲書 三三〇―三三三頁。
- ③⑬ Carrington, *op. cit.*, p. 217. キャリントン 前掲書 一四九頁。Harding, *op. cit.*, p. 44. 砂本 前掲書 八七四―八七五頁。
- ③⑭ 前掲書 八七二頁。
- ③⑮ 前掲書 八九〇頁。
- ③⑯ Ritvo, *op. cit.*, p. 232. リトヴォ 前掲書 三二九頁。
- ③⑰ Harding, *op. cit.*, pp. 41-42.

- ③⑧ *Ibid.*, pp. 42-43.
- ③⑨ James Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980. シェイムズ・ターナー『動物への配慮』（斎藤九一訳）の序ありあ選書 法政大学出版社 一九九四年。
- ④⑩ Werner, *op.cit.*, p. 341. 砂本 前掲書 八八六頁。
- ④⑪ Gwynne Meyers, *London Zoo*, London: Bodley Head, 1976, pp. 87-88. G・ヴェヴァーズ『ロンドン動物園一五〇年』（羽田節子訳）築地書館 一九七九年 一〇二—一〇四頁。
- ④⑫ Harding, *op.cit.*, 43. 砂本 前掲書 八七二頁。
- ④⑬ Saxon, (ed.), *op.cit.*, p. 224.
- ④⑭ Turner, *op.cit.*, p. 133. ターナー 前掲書 一三三二頁。Ritvo, *op.cit.*, p. 23-30. リトヴォ 前掲書 四四—五二頁。
- ④⑮ この点は改めて議論すべき課題である。一言だけ述べておくとして、ベルギー国王レオポルド二世によるアフリカゾウ家畜化計画は、一度挫折した後、一八九九年からの再挑戦でマルミンソウの訓練・使役に成功してゐる。Clive Spinae, *Elephant*, London: T. & A. D. Poyster, 1994, pp. 277-280.
- ④⑯ J・クラットン・ブロック『図説動物文化史事典』（増井久代訳）原書房 一九八九年 一七二—一七三頁。F・E・ソイナー『家畜の歴史』（国分直一・木村伸義訳）法政大学出版社 一九八三年 三一七—三三五頁。Ritvo, *op.cit.*, pp. 23-24. リトヴォ 前掲書 四二頁。John M. Mackenzie, *The Empire of Nature*, Manchester: Manchester University Press, 1988, pp. 167, 181. 砂本 前掲書 一〇八六—一〇四頁。
- ④⑰ ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』（鈴木啓二訳）岩波文庫 二〇〇一年 一一二—一五五頁。
- ④⑱ ロベール・ドロール『象の物語』（長谷川明・池田啓監修）（「知の再発見」双書26）創元社 一九九三年 九八—九九頁。
- ④⑲ Henry M. Stanley, *How I Found Livingstone, 1872*, (Reprint edition, New York: Arno Press, 1970), pp. 358-359, 580.
- ⑤⑰ Ritvo, *op.cit.*, pp. 269-270. リトヴォ 前掲書 三八〇—三八二頁。R. Gordon Cumming, *A Hunter's Life in South Africa, 1850*, (Facsimile reproduction of the 1850 edition, Bulawayo: Books of Zimbabwe, 1980), Vol. 2, p. 18. Frederick Courtenay Selous, *A Hunter's Wandering in Africa*, 1881, (reprint edition, New York: Alexander books, 2001), pp. 49, 364-366. W. D. M. Bell, *The Wanderings of an Elephant Hunter*, Saffron Walden, 1923, pp. 1, 4.
- ⑤⑱ *Ibid.*, pp. 1, 4.
- ⑤⑲ Albert Schweitzer, *Zwischen Wasser und Urwald*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1990, pp. 144-146. シュヴァイツェル『水と原生林のはざま』（野村實訳）岩波文庫 一九五七年 一三七—一三八頁。
- ⑤⑳ Harding, *op.cit.*, pp. 36, 56.
- ⑤㉑ Ritvo, *op.cit.*, p. 17. リトヴォ 前掲書 三三三頁。
- ⑤㉒ クネルツァー (Holmar Knoerzer) が指摘するように、ジュール・ヴェルヌの『蒸気で動く家』には蒸気機関車とゾウのイメージの重なりが見られる。この発想にならえば、鉄のゾウとジャンボの衝突となる。ただ、『蒸気で動く家』の場合、舞台はアジアであり、先述のような役割としてのアジアゾウのイメージと蒸気機関車のイメージが重なっていると考えられる。ヨーロッパでは、蒸気機関車とウマの重なるほうがより自然であろう。Holmar R. Knoerzer, *Jumbos Passion*, Lübeck: Schmidt - Römhild, s. 142. Les oeuvres de Jules Verne, VOL. 29, Lausanne: Rencontre, 1968. 山下正男『動物と西欧思想』中公新書 一九七四年 一五二—一五三頁。Ritvo, *op.cit.*, pp. 19-20. リトヴォ 前掲書 三五—三七頁。
- ⑤㉓ Barnum, *op.cit.*, p. 362. <<http://www.elgintourist.com/sthomas/jumbo.shtml>> ドロール 前掲書 一七八—一七九頁。
- （本学非常勤講師）